

「早くしないと……誠吾が……死んでしまふ……目の前で……燃えているのに……！」  
恐ろしい力が体幹を駆け登って来た。桐島の腕を振りほどこうとする。

目の前に誠吾がいる。冷やしてやらなければ。今すぐに。

身体の内側から水圧を感じた。耳に水が入ったような音がする。途端に身体が重くなり動けなくなった。名前を呼ぶ桐島の声が遠くなっていく。

「誠吾……」

桐島の声が聴こえなくなった。開伽が脳髓を満たし、それが全身へ拡がっていく。見えない水の力で首を絞めつけられている気がして、龍介は大きく口を開けて呼吸を貪った。ひとたび肺を空気で満たせば二分半は持つ。その間に誠吾を助け、冷やすことが俺にはできるはずだ。身体を焼かれながら七転八倒する誠吾が視界に飛び込んできた。龍介は迷わず駆け出した。

桐島の腕の中で龍介は急速に意識を失っていった。携帯で野村早苗に連絡し大至急車を出すよう頼む。桐島は龍介を毛布と布団で包み、流しの下からアルミの湯たんぽを取り出して、大急ぎでポットのお湯を注いだ。手拭いでくるんだそれを龍介の脇の下へ突っ込む。呼吸はあるか？ 大丈夫だ。心音は？ 著明低下している。三分もしないうちに急ブレーキを踏む音が聴こえ、ばたんばたんドアを乱暴に閉めると同時に引き戸ががらりと開き、野村早苗と看護師のまゆちゃんが飛び込んできた。

「高嶺先生！」

まゆちゃんは両手を握り締めわなわなと震えていたが、やがてひとつくんと頷くと、突然プロの顔つきへと様相を変えた。桐島はその変容に少しの間気を取られたが、同じく腕まくりしながら突進してきた早苗に「先生、どいてください」と言われ、慌てて身体を引いた。桐島の目の前で女性看護師二人はてきばきと両手を動かし、あつという間に龍介を簀巻

きにしてしまった。そこへ担架を持った男性看護師二名がなだれ込んできて龍介を乗せ、「先生、早く！」と言いながら玄関を出ていった。早苗とまゆちゃんが火の元と戸締りを確認し走っていく。桐島はヴァンの助手席に座り、そのまま診療所へ向かった。

重症化する前に龍介を温めてやらなければ。そう焦る桐島の脳裡をひとつの疑問が占めていった。

「玄関の鍵が閉まっているので」と龍介は言った。携帯電話を耳にしながら自宅を飛び出した時、引き戸に施錠されているのを桐島自身も確認した。縁側へ回り、倒れ込んでいた龍介へ駆け寄り、すぐに早苗を呼び出した。

引き戸の鍵を開けたのは誰だ？